論文

浪花男の男伊達（1）

野　高　宏　之

はじめに

昨年、本誌において近世大坂の言説の大半が近代の産物であったことを論じた（野高 2015）。そこで今回は、近世の人々によく知られた言説をとりあげる。近世後半の大坂を形容する言説に浪花男がある。

寛政年間に刊行された『摂津名所図会』巻四に、「浪花男」という項目がある。その一文を引用する。

> 武雄の気格を亡はず、意気慷慨して侠流を貯へ、三尺の童子も頼んで引くべからざるの義英あり。むかしより何某の壮士（をとこだて）などいふ輩、人口に膾炙す。今も社首（おやじぶん）の号絶えず

浪花男の気質は「武雄（武勇）」と「侠流」であり、世間は彼らを「壮士（男だて）」「社首（おやじぶん＝親仁分）」と称しているというのである。「侠流」なる者を「侠者」とよぶならば、浪花男は「男だて」「侠者」「親仁分」と称される人をさしたのである。

『摂津名所図会』巻四には「浪花男」のあとに、夏祭で豪壮な地車（だんじり）をひく男たちの姿を描く挿絵があり、「東堀の十二浜」の地車は特に壮麗であるという内容の文章が記されている。大坂では川舟の荷揚げ場を浜とよぶ。関東の河岸に相当するものである。「東堀の十二浜」は東横堀に点在する浜をさす。「東堀十二浜」の浜仲仕が仕立てた地車は座摩神社の夏祭のものであることを宮本又次が指摘している（宮本 1960）。夏祭の地車は町（ちょう）を単位とするので

はなく、浜を単位としていることがうかがえる。勇壮な男たちは、商人の子息ではなく、浜稼ぎの水主・仲仕の若者である。その頭分を近世中期以降、浜親仁という[①]。『摂津名所図会』の読者は夏祭の挿絵をみて浪花男を連想するのである。

『摂陽落穂集』に「大坂名物の歌」が紹介されている。近世後半の大坂で流行した数え歌と思われる。その詞は「橋と船、芝居･新町･米市場、はぜ釣り･石屋町、相撲・地車」というものである。橋と船は浜社会、芝居と新町は盛り場、米市場は堂島浜方、石屋町は長堀の石屋、相撲と地車は市中のイベントである。この多くに浜社会で活動する人々が関係する。「浜社会」は原直史が靱干鰯仲間の研究を通じて使用した歴史用語である（原 2002）。

ところで浪花男といえば、演劇や文学の世界では「浪花五人男」が有名である。元禄年間の大坂で実際にあった出来事をもとに物語化された「浪花五人男」は、のち江戸につたわり鼠小僧をはじめとする「白波五人男」の原型となる。

五人男が人気を得たのは社会に武士と町人の対立する構造が背景にあったからだと考えられてきた。こうした考えは黒木勘蔵の『近世演劇考説』以来である（黒木 1929）。歴史学の研究者もこの考えを支持してきた。たとえば、宮沢誠一は「浪花五人男」の主役である雁金文七について、次のように論じている（宮沢 1994）。

> 文七の男だての背景には、（中略）幕府の直轄地で全国市場の中心として発展してきた大都市大坂に住む町人の強い誇りがあり、それが一方で無骨な田舎侍への蔑視につながるとともに、他方で町人を差別し抑圧する武士への反発を生み出したのである

文七に象徴される「男だて」は武士に対する「町人の強い誇り」であり、武士と町人の対抗関係が演劇世界に投影されていると宮沢は指摘する。

G・P・ループは都市民（商人・職人）がいだく特権階級＝武士階級憎悪の感情が「文七一味を暴れ者から男伊達に変貌させた要因」であると指摘し

ている（ループ 2000）。宮沢と異なるのは武士に対抗する社会集団が町人ではなく都市下層民とする点である（史料用語であれ歴史用語であれ、町人という語句には、都市に土地と家屋を所有する家持階層をさす狭義の意味と、都市住民全体をさす広義の意味がある。本稿では狭義の町人を「町人」、広義の町人を「都市民」と記述する）。しかし敵役を武士に求める視点は宮沢と変わらない。この点を批判したのが田中直子と松崎仁（田中 1986、松崎 1994）である。

松崎は五人男を主人公とする芝居に都市民を圧迫する武士は登場しないことをあきらかにし、武士と都市民の対立という構造的理解を批判する。ただし『摂津名所図会』巻四の「安治川橋」の挿絵には、雁金文七以下の五人男が伊達角左衛門という武士と喧嘩し、尺八でたたき殺したという一文が添えられている。芝居の世界を通じて五人男の世界が社会に流布するにつれ、都市民のあいだで武士を敵役とする五人男の物語が生まれたのも事実である。

本稿は「男だて」を近世大坂の都市社会に位置づけることを目的とする。江戸時代の大坂で流通した浪花男ということばがさし示す「男だて」をてがかりに、近世大坂の都市社会の特色を検討するものである。この作業を通じて、町人社会とはことなる浜社会を浮かび上がらせるのがねらいである。

本稿は３章からなる。第１章では大坂を中心とした上方社会における「男だて」の系譜を概観する。「浪花男」の「男だて」を考える際に障害となるのは、近代以降、「男だて」の概念が都市江戸の事例を中心に形成されている点である。そこでまず江戸中心の男だて＝侠客の概念を通観したうえで、上方における男だての系譜を史料から整理し、江戸との相違点を確認するのがねらいである。

第２章では浪花五人男の虚像と実像を比較する。演劇の世界において浪花男といえば五人男にとどめをさす。元禄年間の事件を演劇にしたもので、浄瑠璃・歌舞伎の世界にとどまらず、五人男は近世社会のヒーローであった。ところでこの事件を記録する若者の行動は喧嘩事を好む無法な乱暴者である。一方、虚構の世界での五人男は信義を重んじ、物事の筋道を立て、弱気を助け強きをくじく侠者である（松崎 1994）。このような五人男の実像と虚

像には大きな隔たりがある。この２つの像をむすぶ鍵として浜社会があることを呈示するのがこの章でのねらいである。

第３章では、浜の社会と文化に光をあてる。それまで未組織であった都市下層民＝仲仕・人足らが、18世紀半ばから浜を中心に組織され浜社会形成すること、都市文化の創造からは無縁であった都市下層民が浜社会の形成を契機に祭礼文化の担い手になることを概観する。

第１章　男だての系譜

１　男だて

前近代社会では、男には社会的な意味があり、それは外見から明らかであった。近世以前は烏帽子をかぶる者、近世では月代をそり髷をゆう者である。有髪で烏帽子をかぶらず、髷をゆわない者は童である。元服前の年少者はむろん、牛飼い童など成人後も総髪（大童）の者も童であった。また出家し剃髪した者を男とは区別した（高橋 1984）。「男になる」とは武士として元服することであり、「男をやめる」とは出家することを意味した。長門本『平家物語』巻十二には源義仲の養親が、はじめは僧侶にしようと思っていた義仲に武芸の才能のあることを見ぬき、義仲を「おとこになしてけり」という記述がある。戦国期には戦士（侍）を男と称した。江戸時代の「男だて」に武の気風が残るのはこの影響である。侍は晴れの舞台である戦場できらびやかな甲冑で身体を飾りたてた。これと衆道の流行があいまって、男が派手な衣装で衆人の前に姿を現すことを「伊達者」といい、これも「男だて」の一種であった。

「だて」は「立て」に由来する[②]。「立つ」の原義は「はっきりと人の目に見える形で立ち現れること」である（多田 2014）。ここから、男性性が際立つことを「男」を「立つ」といい、「男だて」となった（戸部 1998、松崎 1994）。また「伊達者」や「かぶき者」を「男だて」に数えることもある。「男だて」は乱暴者という意味以外に、派手な衣装を着た者という意味を含んでいる。これにより、武芸をひけらかす者、派手な衣装・異様な装束を好む者を「男だて」と呼んだことが説明できる。

「男だて」は硬派の男をさす場合が多い。しかし身なりで異性を引きつけ

る「うわき男立」とよばれる若い衆や、衣装で他人と「だてくらべ」をする「女房だてもの」という女性も現れた（『久夢日記』、『御当代記』一）。

2　江戸の男だて

近代人にとって「男だて」は「侠客」「遊侠」をさす言葉となる。この分野で『侠客の種類』、『江戸時代の侠客』、『本邦侠客の研究』、『遊侠奇談』といった書名・論文名を付けることが多いのはそのあらわれである（幸田 1911、子母澤 1930、子母澤 1947、尾形 1933、西山 1989、戸部 1998）。

史料用語としての「侠客」は幕末まで確認できない。尾形鶴吉は『恵比良濃梅』（享和元年）、『喜遊笑覧』（文政３年）などが「侠客」が現れる早い事例であるという（尾形 1933）。「侠客」に相当する言葉として、江戸時代には、あぶれ者（溢れ者）、奴（街奴・旗本奴）、キホヒ組（競い組・気負い組）、六法組、カクジン（闕人）、トヲリモノ（通り者）、タテ衆（伊達衆）、バクチ打（博奕打）、渡世人、お構者、伝法、勇みなどがあり、じつに多様である（尾形 1933、戸部 1998）。

「侠客」をふくめ「男だて」の研究は都市江戸が中心である。そこでまず江戸の「侠客」の系譜を確認する。

幸田露伴は侠客を３つのタイプに分類する（幸田 1911）。１つめは圧迫に対する反抗の体現者としての侠客である。江戸初期に現れ、「市中の気侠のある者」と「武士の仕官の途に断念した者」に大別される。「市中の気侠のある者」は一般には「町奴」として知られる存在である。「町奴」と対立するグループとして「旗本奴」がある。徳川家家臣団本人及び親族を出自とする「かぶき者」である。幸田のいう「武士の仕官の途に断念した者」は「旗本奴」にはあたらない。むしろ、後にのべる上方の「あぶれ者」の系譜につながる存在だと考えられる。「町奴」と「旗本奴」は「かぶき者」、「きおい組」とも称される。寛政５（1793）年大坂版『俳諧世吉の物競』には江戸の競組を大坂では男達（男だて）というと記されており、近世後期の江戸では「きおい組」が多く使われたようだ（三田村 1933）。２つめは博徒である。戦国期から盛んになり、元文年間の禁制によって衰えたが、天明頃から復活し天保年間にかけて盛ん

になったという。３つめは人入れ業の親方のうち侠客肌の者である。全国の大名屋敷が集中する江戸では､六尺や中間といった武家奉公人の需要が多く、多数の日用人足が必要であった。日用人足は人宿とよばれる口入れ業者を通じて大名や旗本家に出入した。そのため早くから日用座が公認され、人足の監督差配をおこなったのである。以上､侠客には町奴(市中に気侠のある者)、博徒、人宿の親方があり、これとは別に「武士の仕官の途に断念した者」があることが幸田によって整理された。

幸田が侠客のタイプとして反抗の体現者、博徒、口入れ業者の３者を示したのに対し、江馬務は近世の初期と中期以降のちがいを強調する。この観点はその後の侠客研究に大きな影響を与えた。江馬が初期に「町奴」「旗本奴」が現れるとする点は幸田と同様である。中期以降は札差ら豪商による「通人の侠客」､「鳶の者」、義賊（鼠小僧など)､「侠客らしい侠客」（博徒）が現れると整理した。ちなみに「鳶の者」を江馬は大名・富豪家出入の者と位置づけており、幸田のいう口入れ業者と同じ系列である（江馬 1928)。

尾形鶴吉は、江戸初期の「男だて」について、幸田のいう「市中の気侠のある者」と「武士の仕官の途に断念した者」を町奴と旗本奴に修正した。この見解が現在も踏襲されている。その上で､近世前半の「男だて」を「ダテ」､後半の「男だて」を「侠者」と区別した。したがって「ダテ」に相当するのが町奴と旗本奴となる。一方、近世後半に登場する「侠者」＝「侠客」の内実は①火消人足（鳶）②目明③角力④博徒⑤人入（口入れ）⑥金侠（大通など）⑦女侠であるとした。尾形の功績は、近世前半と後半の質的な変化を町奴・旗本奴から侠客（親分）という形で整理した点にある。「侠客」の系譜を、かぶき者→旗本奴・町奴→火消人足・博徒のように整理した猪野健治もこのモデルに従っている。尾形と猪野に共通するのは明治以降の博徒の起源を近世の侠客に求める視点である。(尾形 1933、猪野 1973)。尾形・猪野が示す系譜が通説として定着するにつれ､「武士の仕官の途に断念した者」の系譜は、江戸では忘れられていった。

近世後半の「男だて」の中核に博徒をおく考え方に対し、三田村鳶魚は異なった見解を示す。三田村は侠客と博徒を区別する。博徒は生業をもたない

無職渡世の者をさす。天保以前には侠客（男だて）とはみなされなかったと指摘する。これをうけ、江戸中期以降の侠客は生業をもつ者と無職者に大別されることを指摘したのが戸部新十郎である。近世初期の町奴や旗本奴が消えたあと、無宿・無職の侠客が現れる。ここから博徒や目明が派生する。これとは別に鳶・火消人足といった生業をもつ侠客も現れるというのが戸部の考えである（三田村 1939a、戸部 1998）。

三田村は江戸っ子の起源を「男だて」に求めた（三田村 1933）。そのねらいは、男だてに始まる一連の系譜を江戸っ子の勇みにつなげるというものである。三田村は近世初期における武家社会と町人社会の男だてを明確に区別する。武家社会では武家奉公人から奴風が現れ、旗本奴はその模倣である。一方、町人（都市民）のかぶき者は奴・丹前・六法とよばれ尺八や米差しを得物とした。中期以降、有徳人の息子が模倣して「きおい組」（幕府常雇いの人足・民間の日庸人足）となり、「きおい組」はやがて富裕町人の大通・通人と都市下層民の通り者に分かれた。このように三田村は富裕町人の「通」から都市下層民の「勇み」が派生し、江戸っ子につながるという系譜を考えている。

ここまで江戸という都市社会を中心に組み立てられた侠客研究の系譜をたどってきた。これを整理すると、まず幸田露伴は侠客＝男だてに関連する要素を開示して、その後の研究につなげた。尾形鶴吉や猪野健治は侠客の系譜を近代以降の博徒＝ヤクザ集団に結びつけた。戸部は、近世後半に侠客は生業をもつ鳶などの者と無職・無宿の博徒に分化することを指摘した。一方、三田村鳶魚は、男だての系譜を江戸っ子（都市下層民）につなげていった。これにより、三田村が描く侠客（男だて）の世界は尾形や猪野が描く侠客（博徒）と大きな隔たりが生まれた。

明治以降、尾形や猪野が示したような、ヤクザ＝侠客の起源を男だてに求める考えが主流となり、男だてを江戸っ子につなげる三田村の考えは継承されていない。しかし筆者は三田村説の方が、江戸時代の人々の意識に近かったのではないかと考える。三田村が侠客＝「男だて」を江戸っ子につなげたように、上方でも浪花男を「男だて」につなげる回路が見いだせるのではないか。このような見通しのもとに、大坂の「男だて」を概観する。

3　大坂の男だて

「男だて」は都市江戸にこそふさわしい。浪花男の気質はその対極にある。このように現代人は考える。しかし『俳諧世吉の物競』[3]は

> 男達といへば大坂をおもひ、競組（きおいぐみ）と呼ぶは江戸に止まる

と記して、「男だて」は江戸よりも大坂の人気（じんき）であると評価している。近世の知識人・文化人も男だては大坂と認識していた。文化11（1814）年頃成立の『耳嚢』（巻の２「浪華任侠の事」）は

> 大坂には昔より俗に男だてといふもの流行しける

と記しており、江戸でも大坂は男だてと認めていたことがわかる[4]。

こうした感覚は近代人にもあり、尾形鶴吉は、大坂が侠客の源流であったとして、次のように記している（尾形 1933）。

> （大坂の気質は）江戸に先んじて侠客の源流を持つたのにかゝはらず、江戸児気質の如き思想的背景を欠如した故に（中略）後継者を絶つて自滅するに至り、爾後江戸をして侠客の本場たるの観あらしめたのである。

三田純一も「侠気＝男気が北浜の人々の特殊な感覚であった」と述べている。（三田 1987）。

芝居の世界でも大坂では「男伊達狂言」が好まれたという[5]。この点を松崎仁は次のように記している（松崎 1994）。

> 「芝居の男だて」という言葉によって現代の観客がまず思いうかべるのは、助六や幡随院長兵衛であろう。江戸風男だてである。しかし近世の戯曲史をさかのぼると、男だての芝居は大坂から始まる。（中略。無頼から侠へ）男伊達を主役とする芝居は大坂から始まる。この大坂の男伊達

の性格は一般の男伊達の概念からはずれるものが多い。

男だての芝居は大坂から始まるとする松崎は、大坂の演劇世界における男だての性格は通常の概念からはずれるものが多いことも指摘している。男だてには２つの概念があったようである。この点に留意しながら、上方における男だての系譜を概観する。

芝居の世界のみならず実社会においても侠の気風があった上方では、室町後期から江戸初期にかけて、幸田のいう「武士の仕官の途に断念した者」が活動した。彼らは悪党、あぶれ者とよばれた。鎌倉末期の播磨の悪党をえがいた『峰相記』は彼らを「異類異形なるナルアリサマ人倫ニ異ナリ」と書き記している。やがて上方では悪党の一部を「あぶれ者」とよぶようになった。

『太平記』は、あぶれ者が登場する早い事例である。『太平記』巻八「四月三日京軍の事」には、元弘３（1333）年４月３日、京都を攻撃する赤松軍のなかに「真木･葛葉」[6]の「溢(あぶ)れ者ども」が加わっていることが記述されている。また巻九「番馬自害の事」には、京都での合戦に敗れ関東をめざして落ちる六波羅探題勢を「山立、強盗、溢れ者ども」が番馬宿近くで待ち受けたことが記されている。

真木(牧)･葛葉(楠葉)は淀川中流域に位置する交通の要衝である。牧の馬飼、禁野の鷹狩や餌取、楠葉の土器作り、枚方の船頭･水主などが王家･摂関家･石清水八幡宮などの保護をえて雑居していた所である。こうした空間には諸方から流民・遊民が流れ込みやすい。彼らよそ者は、日常はさまざまな雑業に従事しながら無法者として横行し、紛争があれば傭兵となって出かけていく生活をしていた。赤松の軍勢に加わった牧･楠葉の溢れ者は、地元の武士･地主・交通業者（馬借・船頭）によそ者が加わって悪党的な活動を展開した勢力であったと考えられる[7]。また番馬の宿がある湖東地域も東海道と東山道の分岐点にあたり、古くからの軍事・交通の要衝であった。この地域にも馬借を中心とした運送業者が広域に活動しており、よそ者が流れ込む空間であった。淀川流域と湖東地域に共通するのは、水陸の輸送業者が生業を展開するさいに、既存の社会秩序からはみ出し、悪党的な集団とみなされやすかっ

たこと、耕地を生活の糧としないゆえに、よそ者が流れ込みやすい空間を形成したことである。このような空間を林屋辰三郎は「散所」とよび、網野善彦は「都市的な空間」と名づけた（林屋 1954、網野 2003）。こうして鎌倉後期から悪党的な活動が展開するのであるが、在地勢力よりも流れ者がその勢力の主体としてみなされたとき、その集団は「溢れ者ども」とよばれたようである。

『室町殿物語』には戦国期上方のあぶれ者が登場する[8]。彼らは異類異形のいでたちをしており、悪党の系譜を引くことがわかる。笹川祥生は『室町殿物語』にあらわれるあぶれ者を３つに分けている[9]。１つめは、「支配者の権力機構から逸脱している者」である。幸田露伴のいう「武士の仕官の途に断念した者」に近い存在である。中世を通じて彼らの住所は明確であった、しかし近世に入いるや、「あぶれ者」は住所が定まらず、大都会に寄生する無頼の徒になったという。２つめは乱暴者、３つめは浮浪者である。

中世末の「支配者の権力機構から逸脱している」あぶれ者の事例として、『室町殿物語』は茨組をとりあげる（巻９－65「茨組盗賊の事」）。

> 諸方牢々の溢れものども、京都に徘徊し、爰やかしこに隠れ住せしめ、徒党いたし、茨組と号して喧嘩を専とし、夜は夜討ち・強盗を業として、往還の輩をなやまし、世間物騒なる事限りなし

この記述にみられるように、当時の「あぶれ者」は「組」とよばれる集団をつくり、洛中を徘徊し、喧嘩を好み、往来で強盗をはたらく存在とみなされたのである。

また喧嘩を買うあぶれ者の事例として『室町殿物語』は堺の有徳者の子弟をとりあげる（『室町殿物語』巻９－67「喧嘩を好む徒党の事」）。

> 爰に南北（堺のこと、筆者註）近辺の有徳なる者どもの子ども、さるべき剛のものなどをかたらひて、或ひは四五十人、或ひは百・百五拾人などうちつれて、様々の道具をかづかせ、堺大小路・天満を初めとして、ほ

うぼうにぎわひことなる、人立ちおほきかたをえつて、異形・異類の出で立ちにて「喧嘩かはうかはう」と、五人・三人づゝ触れてまわりける。

堺の若者が数十人から百数十人の集団を形成し、異類·異形の服装をして、得物をもち、喧嘩を買おうを触れながら、堺や大坂天満など人出の多い往来を練り歩くようすが描かれている。『室町殿物語』は彼らを「あぶれものども」「喧嘩買ども」とよんでいる。また同じ話を載せた『室町殿日記』は彼らを「奴喧嘩徒党」と表現している。

『室町殿物語』から２つのタイプのあぶれ者を紹介した。１つは地方から京都に流れ込んだ牢人者が無頼化したもの、もう１つは都市富裕町人の師弟である。その出自は異なるものの喧嘩を好む点では共通する。こうした集団を当時あぶれ者とよんだのである。

近世初期にあって「にぎわひことなる（賑わい殊なる）、人立ちおほきかた（多き方）」は遊所と火事場である。慶安元（1648）年の大坂において、廓での喧嘩刃傷は切られ損と定めた町触や火事場での帯刀禁止の町触があいついで出された。この背景には廓での喧嘩が多かったことを示している[10]。

近世初期のあぶれ者の事例に『武道張合大鑑』にある「男風流名よせ」がある[11]。荒物屋伝六をリーダーとする荒物組と、三浦の荒次郎をリーダーとする三浦組はそれぞれ20名あまりの集団であり、大坂新町橋辺りで抗争事件をおこしたという設定である。集団の構成員の大半は阿波座の梶平、いたち堀の革、伝法の三八、横堀の小天狗、玉造の蛇之助といった通り名をもつ。彼らの武器は、荒物組は「米さしの先、鑓のごとく尖らし」たもの、三浦組は尺八に懐中剣をしこんだものである。米さしや尺八が町奴の得物であることは三田村鳶魚が指摘している（三田村 1933）。それが上方でも同様であったことが推測される。米さしが米仲仕の道具であるのにたいし、尺八は虚無僧＝牢人の道具であることから、荒物組は仲仕などの労働者、三浦組は牢人を主流する集団として描かれたことが考えられる。

近世初期の牢人は野非人（ホームレス）と連続する存在でもあった。武士身分の者が村に居住することは豊臣政権以来禁止されていたが、徳川幕府はさ

らに都市部でも牢人に宿を貸すことを禁じたのである。近世初期の大坂には牢人や野非人が往来にあふれ、幕府の役人や町人はかれらを犯罪予備軍とみなした。市中の捕物・火事場の規定を記した子年４月５日付の町奉行書付[12]に「のらこときの者ハ、如例何方ニ而も縄をかけ候ても不苦候」という一条がある[13]。のら（野良）ごときの者とは住所をもたない牢人・野非人を含めた総称であったと考えられる。

近世初期の大坂では、牢人、野非人、溢れ者の順に取締が強化された。

まず、牢人の摘発は大坂夏の陣（1615年）の直後からはじまる。それが一段落するのは、豊臣家重臣であった大野主馬治房の妻子逮捕をきっかけに主馬の縁者摘発を命じた慶安２（1649）年ころである[14]。

幸田は「武士の仕官の途に断念した者」を侠客の一つのタイプに数えた。これを旗本奴に読みかえた尾形の解釈が現代にも継承されている（幸田1911、尾形 1933）。これとは別に「武士の仕官の途に断念した者」を、南北朝期に現れた傭兵の集団が江戸時代になって仕官の途をうしない牢人や「ごろつき」の類に結びつけて考える見方もある（折口 1928、三田村 1928、兵藤 1995）。筆者は上方において「武士の仕官の途に断念した者」は牢人につながると考える方が近世初期の都市社会にはふさわしいのではないかと筆者は考える。

野非人対策は豊臣政権からみられるが、とりわけ寛永～延宝（1624～1681）ころは飢饉を背景とした野非人対策が都市問題の中心であった。

16世紀末から17世紀初めにかけて、大坂では天王寺・道頓堀・鳶田・天満の４カ所に貧人の聚落が成立した。この４カ所は垣外または四ケ所とよばれた。垣内に居住する者は非人身分として組織された。その後も市中への野非人の流入が続いた。幕府は寛文10（1670）年、延宝3（1675）年、貞享元（1684）年とたびたび野非人の狩り込み（一斉検挙）をおこなうとともに、四ケ所の非人に彼らの監視・取締を命じた。近世大坂ではたえまなく流入する野非人を非人によって監視させる体制が確立したのである[15]。

牢人・野非人対策が一段落したのち、喧嘩を買ってあるく若者集団＝あばれ者の取締が課題となったのである。

「浪花五人男」は元禄14年に大坂の西横堀付近でおこった実際の事件を芝居にしたものである。この事件の概略を記す⑯。

元禄14年（1701）６月６日の夜、南久宝寺町四丁目住人河内屋五兵衛雇人喜兵衛・同町三木屋勘兵衛・播磨屋八兵衛下人五郎の３人が西横堀浜側に納涼に出かけた。その帰り道に北久太郎町西横堀浜側で難波町の木挽（こびき）の市兵衛・庚申の勘兵衛が喜兵衛と五郎に喧嘩をしかけた。そこへ博労町の庵の平兵衛が通りかかり、懐剣で喜兵衛の胸を突き立ち去った。この事件で「あぶれ者」が検挙され、翌元禄15年８月26日に５人が処刑された。事件の関係者には、ほかに、かいたての吉右衛門、因果の平兵衛、川船水主の飛来雷庄九郎などがおり、喧嘩屋五郎左衛門と三つ引治兵衛が彼らの頭分であった。

五人組の呼び名は元禄15年に処刑された人数に由来するのであって、五人男が所属する集団は七組とも称し、他のメンバーもいた。ともあれ、この事件を契機に上方からあぶれ者は姿をけしていく。

大坂では近世中期以降、あぶれ者･あばれ者にかわって、男だてが現れる。あぶれ者が喧嘩買いであったのに対して、男だては「だてひき」といって喧嘩を預かる者であった。根津四郎右衛門（黒船忠右衛門）や朝比奈三郎兵衛らが浪花の男だてを代表した⑰。

頼まれごとは引き受け、侠の気風をもつ親仁分（おやじぶん）を『摂津名所図会』が浪花男と称したことは本稿のはじめに紹介したとおりである。「侠」をほこる親仁分を「親分」ともいった。『浪華人物誌』巻四には、「舟乗・仲仕・魚売等すべて侠を事とするもの皆尊で親分といひ、其指揮を厳守せざる者なし」という一文がある。「親仁」や「親分」は「侠」すなわち「男だて」によって水主･仲士・魚売（ぼてふり）を宰領したことがわかる。

「侠」によって男をたてる風を「浪花振」といったことが浜松哥国の『よしな草』にみえる（大阪市立中央図書館蔵）。未翻刻の資料なので、やや長文になるが紹介する。

> なにハに浪花振（なにわぶり）という一気象（くせ）あり、就中男達（なかんつくをとこたて）といへるもの時として其名を立、他邦（たこく）までも聞へしものも多かる。それさへ差別有て

絜挨の立仕といふハ熱四郎右衛門か輩にて、生質理非明白を旨とし、強を折といへ共破らす、弱きは助て引立るの意気地、義に望てハ金鉄のことく、彼姥の吉兵衛との立引堂嶋にて熱米とて今に除米する類ひ、人のよく知る所なれハ、其由ハ洩しぬ、今猶根津四郎か所縁とて気風ともに相続して、悪党等といへともしたひ来る時ハ飽まて世話を尽して善心に元復せ、或は遠国より親戚の手を離れて立寄ものも旨宜によつてハ我方に食客となし置、真情に立かへらせ、国元の音信まて取持して、くさり縄も捨さる気哲、男一癖の妙感する所も多かり、誠のをとこ建ハ衣体もかさらす異風も好ます、元より男たてハ御法度なり、然るに多分彼戯場に男達の名をかる五人男なと所為悪行の者四民にはつれたる族と熱か徒とハ雲泥の違ひめあるを思慮して讃話すへき程の事にもあらされと、是もなにハの名物なり、おなし口にいはんハ口惜けれ。

ここに記された内容は次の７点である。①大坂人には浪花振という気質がある。②とりわけ男だては時に他国にまで名をとどろかせることがある。③第一のだて男は熱四郎右衛門である。④四郎右衛門が姥の吉兵衛とのあいだで堂島の米市を舞台におこなった立引（だて引き）が有名で、いまでも「ねづ米」として除米することで知られている。⑤悪党や無宿者でも頼って来る者は寄宿させ厚生させている。⑥本当の男だては華美な衣装や異様な服装をしない。⑦男だては禁止されている。一方、芝居の世界では熱四郎右衛門とは対極にある五人男などの悪漢を男だてと称してもちあげるが、これも浪花の名物である。

③の熱四郎右衛門は根津四郎右衛門のこと。根津については第２章でとりあげる。④「だて引き」は意気を張って仲裁することである。江戸時代の人はだて引きを見物して楽しむ感性があった。『相撲今昔物語』には、もめ事が起きそうな相撲の一番を、頭取や行司やがどのようにさばくかを見るのは相撲の取組を見るより楽しみだとする感性が記されている。⑥には２種類の男だてがある。１つは侠者の意味である。もう１つの禁止の対象となる男だては近世初期の「だて者」「かぶき者」が好んだ、華美で異様な服装をする

ことである。④には熱四郎右衛門と堂島との関係が記されているが、これについては後述する。

「浪花振」「浪花男」は、「武」の気概を持ち、頼まれごとは引き受け、場合によっては無宿悪人も居候させる。それによって名を売る者であることがわかる。また、『よしな草』は人望のある熱四郎右衛門と無頼者の五人男を対極に位置づけながら、どちらも浪花の名物としている。これは五人男を「あぶれ者」、熱四郎右衛門を「侠者」と考えればよい。大坂では男だての系譜は「あぶれ者」から「侠者」へ推移したのである。

以上から、大坂の男だては、近世初期から元禄頃までは異様な風体で市中を練り歩く無頼の若者＝「あぶれ者」をさし、中期からは人望があり人の世話を引き受ける壮年の侠者をさす言葉となる。前者を第一の系譜、後者を第二の系譜とすると、両者の関係は以下のようになる。

第一の系譜：無頼の若者　　喧嘩を買う　悪者　浪花五人男

第二の系譜：伊達引の壮者　喧嘩の仲裁　善者　根津四郎右衛門

しかし、芝居の世界でははは第一の系譜と第二の系譜をあわせたヒーローも形成され、男だて像を複雑にしている。

江戸後期の京都町奉行所与力が執筆した『翁草』に「六十年程以前に思ふに、江戸は不知、大坂は遊侠の徒多く、総体風俗卑しく（中略）今は難波人の和らかさ」という一文がある。ここでいう60年前はおよそ元禄年間にあたる。雁金文七らの「あぶれ者」がいた頃である。京都町奉行所の与力は、18世紀前半と後半とでは、難波人の気質が変化したとみているのである。大坂の「男だて」は、「あぶれ者」から「侠者」に変化していく。「男だて」のこうした変容が芝居の世界でも確認できると松崎仁は指摘する。松崎によると、芝居の「男だてもの」のヒーローには信義を重んじ弱気を助ける侠者の性格が与えられているが、芝居の内容を分析すると、ヒーローの隠れた性格として喧嘩師・あばれ者が浮かび上がるという（松崎 1994）。虚構の世界でのヒーローには第一の系譜をモデルとするものと第二の系譜をモデルにするものとがある。このうち第二の系譜をモデルとするヒーローも壮年の人望のある性格があたえられるが、その裏に喧嘩買を好む若者の性格が潜んでいるというのが

松崎の評価である。

また、第二の系譜の男だては相撲社会と近い関係にある。この点は第２・第３章で検討するが、すでに三田村鳶魚が次のように指摘している（三田村1943）。

> 大坂に俠客が盛んだったのは元禄、享保間と元文・明和間でした。こう画期されるのは、北浜の景気によるのでしょう。両期ともに俠客の大体が、大坂でいう中仕、江戸でいう小揚、いずれも荷役に従事する人達から出ています。（中略）彼らが自然と相撲にむかう。大坂の俠客が（中略）相撲に傾倒する連中が多かったのは、当然の成行でした。

以上、本章ではまず江戸の俠客研究を整理した。その結果、幸田露伴が近世初期の俠客の一要素としてあげた「武士の仕官の途に断念した者」が、その後の研究では捨象され、近世初期の「町奴」「旗本奴」→近世後期の火消人足・鳶(生業)／博徒(無職)という系譜が現在の通説になっていることを確認した。

一方、上方とくに大坂の男だてについては、江戸のような研究がないなかで筆者が試案を示した。それは「武士の仕官の途に断念した者」であるあぶれ者が、室町期から近世初期にかけて都市に流れ込み、喧嘩を買う集団となった。元禄年間に一斉摘発によってあぶれ者が姿を消し、かわって近世中期からは喧嘩を預かる俠者としての男だてが登場する、というものである。

註

①『諸事控―浜親仁海部屋喜兵衛覚書』上・下（『大阪市史史料』第54輯・56輯、1999・2000年）。
②『岩波古語辞典』（岩波書店、1974年）「だて」【伊達】の項目。
③ 三田村 1933の引用史料による。
④『耳嚢』は江戸の南町奉行をつとめた根岸鎮衛の随筆。岩波文庫所収。
⑤『歌舞伎登場人物事典』（白水社、2006年）「黒船忠右衛門」の項目。
⑥ 牧・楠葉。いずれも現枚方市。
⑦『枚方市史』第２巻第２章第１節、1972年。

⑧『室町殿物語』は戦国期の京都を中心とする上方社会の世相を虚実織りまぜてえがいた物語である。東洋文庫所収。
⑨ 東洋文庫『室町殿物語』解説。
⑩「御触及口達」所収補触4・5（『大阪市史』第３、1911年）。廓での刃傷は罪に問われないことを廓空間のアジール性から説明することが多いが、近世初期・廓という時間と空間を考えた時、喧嘩という要素が大きかったように思う。
⑪『武道張合大鑑』は仮名草子である。しかしこうした虚構の物語がつくられる背景には、ここに描かれたような類似のできごとが実際の社会でみられたと考えられる。
⑫ 大阪町奉行が与力･同心に伝達する組触と思われる。組触については拙稿「大阪町奉行所の組触について」（『大阪の歴史』61号、2003年）参照。
⑬『大坂御仕置留書』（大阪府立中之島図書館所蔵）、『せん年より御ふれふみ』。『せん年より御ふれふみ』は2004年、大阪市立大学大学院文学研究科・都市文化研究センターから『近世大坂町触関係史料』として翻刻されている。この史料集では「のらごときの者」を「のらもキ乃者」と翻刻しているが、原本によって訂正した。
⑭ 慶安２年２月８日付京都所司代触。『京都町触集成』別巻２の日付は２月５日。大田南畝『一話一言』巻43、『よしな草』上（大阪市立中央図書館蔵）、小枝家文書（個人蔵）、藻井家文書（個人蔵）等で確認できる。
⑮『新修大阪市史』第３巻、1989年。大阪の部落史委員会編『大阪の部落史』第10巻、解放出版社、2009年。
⑯ 浪花五人男の実録を記録した史料として、『浪華人物誌』以外に以下のものがある。「元禄溢者記」（元禄16年７月御用帳写　大阪市史編纂所蔵）、「町中溢者御詮義留書」（大阪府立中之島図書館蔵）、『元禄宝永珍話』巻２（『続日本随筆大成』別巻５、吉川弘文館、1982年）、「町中あはれ物御詮義留書　元禄16年７月御用帳写」（『視聴草』第10集、内閣文庫所蔵史籍叢刊、汲古書院、1985年）、「浪華五侠伝（元禄16年７月御用帳写）」（『燕石十種』第２巻、中央公論社、1979年）、『浪花文庫』（『大坂市史史料』第３輯、1981年）、『摂陽落穂集』７（『新燕石十種』第８巻、中央公論社、1982年）、『浪花奇談』続編上3、『浪華人物誌』巻４を確認している。
⑰ 浪花五人男および根津四郎右衛門（黒船忠右衛門）・朝比奈三郎兵衛については第２章をあつかう。

参考資料

ゲイリー・Ｐ・ループ　2000年「浪速五人男―近世大坂の民衆意識―」（脇田修、Ｊ・Ｌ・マクレイン編『近世の大阪』大阪大学出版会）。
網野善彦　2003年「都市的な場と都市」（網野善彦･横井清『都市　職能民の活動』中央公論新社）。

飯田直樹　2006年「大阪の都市社会と大阪相撲」（大阪市立大学文学研究科叢書編集委員会編『近代大阪と都市文化』清文堂）。
猪野健治　1973年『やくざと日本人』三笠書房。のち、ちくま文庫、1999年に収載。
尾形鶴吉　1933年『本邦侠客の研究』博芳社。のち西田書店から1981年に復刊。
折口信夫　1928年「ごろつきの話」（『民俗藝術』昭和3年8・9月号。のち『折口信夫全集』第3巻　中央公論社　1966年）。
黒木勘蔵　1929年『近世演劇考説』六合館。
幸田露伴　1911年「侠客の種類」。田中優子編『江戸』（作品社　1998年）所収。
江馬務　1928年「侠客の研究」（『風俗研究』98･101･103。のち『江馬務著作集』第6巻（中央公論社　1977年）所収）
笹川祥生　1980年「溢れもの」（東洋文庫『室町殿物語』2　p.140　注）
子母澤寛　1930年『遊俠奇談』民友社（のち同名で桃源社から復刊。1971年）
子母澤寛　1947年『遊俠譚』誠光社（のち『遊俠奇談』で桃源社から復刊。1971年）
高島慎助　2013年『大阪の力石』岩田書院
高橋昌明　1984年　「中世の身分制」（歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本史』3　中世2』東京大学出版会　1984年）
多田一臣編　2014年『万葉語誌』　筑摩書房
田中直子　1986年「男作五雁金」（国立劇場芸能調査室編『浄瑠璃作品要説』4　竹田出雲編　国立劇場）。
戸部新十郎　1998年『侠客』広済堂出版。
西山松之助　1989年「江戸時代の侠客」『日本の美と伝統』岩波書店。
野高宏之　2015年「近世大坂の言説に関する一考察」（『奈良県立大学研究季報』第25巻第2号）。
林屋辰三郎　1954年「散所　その発生と展開」（『史林』37-6。のち『古代国家の解体』吉川弘文館、1955年所収）。
原直史　2002年「近世大坂の市場社会と「浜社会」―靱干鰯仲間の周辺社会を素材として―（都市史研究会編『年報都市史研究』10　山川出版社）。
兵藤裕己　1995年『太平記〈読み〉の可能性』講談社。のち、講談社学術文庫に所収。
藤木久志　1987年『戦国の作法』平凡社。
松崎仁　1994年『歌舞伎・浄瑠璃・ことば』八木書店。
三田純一　1987年『おおさかののろけ』駸々堂出版。
三田村鳶魚　1928年「慶長前後の泥棒」（『中央公論』昭和3年2月号。のち『三田村鳶魚全集』第14巻　中央公論社　1975年所収）
三田村鳶魚　1933年『江戸っ子』早稲田大学出版部。のち、『三田村鳶魚全集』第7巻　中央公論社　1975年所収。
三田村鳶魚　1943年「相撲ばなし」（『相撲と野球』昭和18年5月～11月号、の

ち『三田村鳶魚全集』第15巻　中央公論社　1976年所収)。
三田村鳶魚　1939年a「侠客の話」(『江戸読本』昭和14年2月･3月号。のち『三田村鳶魚全集』第13巻　中央公論社　1975年所収)。
三田村鳶魚　1939年b「相撲の話」(『江戸読物』昭和14年1月～6月号。のち『三田村鳶魚全集』第15巻　中央公論社　1976年)。
宮沢誠一　1994年「町人文化の形成」(『岩波講座日本通史　近世２』)。
宮本又次　1960年『船場』ミネルヴァ書房。
八木滋　2006年「近世後期大坂における市場社会と民衆世界」(大阪市立大学文学研究科叢書編集委員会編『近代大阪と都市文化』　清文堂)。

引用史料

『御当代記』一 (戸田茂睡『御当代記』東洋文庫　平凡社　1998年)
『摂津名所図会』巻４　大阪市史立中央図書館蔵。
『摂陽落穂集』から「大坂名物の歌の事」(『新燕石十種』第８巻　国書刊行会　1982年)。
『相撲今昔物語』(『新燕石十種』第6巻　国書刊行会　1981年)
『太平記』巻八「四月三日京軍の事」(兵藤裕己校注『太平記』1 岩波文庫 2014年)。
『太平記』(兵藤裕己校注『太平記』2　岩波文庫　2014年)。
『久夢日記』(『続日本随筆大成』別巻5　吉川弘文館)。
『峰相記』(『続群書類聚』28輯上)。
『耳嚢』巻2 「浪華任侠の事」(根岸鎮衛　『耳嚢』上　岩波文庫　1991年)。
『室町殿日記』19 「奴喧嘩徒党の事」 大阪市立中央図書館蔵。
『室町殿物語』下 (『東洋文庫』平凡社　1980年)。
『守貞謾考』巻1 (『近世風俗誌』2　岩波文庫　1997年)。
『よしな草』浜松哥国　大阪市立中央図書館蔵。